

ライフスタイル論をめぐる考察

野田俊作 (大阪)

要旨

キーワード :

解釈学的方法からの脱却

ライフスタイル診断のための最も重要な方法は、早期回想の分析である。早期回想の解釈は、ながらく職人芸的に直感的におこなわれてきた。私の師匠であるシャルマン Bernard Shulman やモザク Harold Mozak は、早期回想を聞いた瞬間に解釈を述べるが、その根拠を尋ねると、「どうしてそう思わないんだい？」と肩をすくめるだけで、論理的な説明をしてくれるわけではない。彼らは、現象学 pheno-menology ないし解釈学 hermeneutics の影響下にあつて、早期回想をディルタイ Wilhelm Dilthey (1833-1911) 風に「直感的に了解」するのである。

しかし、近年、より系統的な方法が話題になっている。私は「アドラー心理学とフロイト心理学のエピソード分析法」^[1]という論文において、はじめてエピソードを系統的に分析する方法を提唱した。それは図 1 に示すようなものである。すなわち、外部世界 objective world にある状況 situation がおこると、人はそれを事態 event としてとらえる。その事態を、内的な価値基準 value standard と照合して、「よい」のか「わるい」のかを判断する。「よい」のであればそのまま放置するが、「わるい」のであれば「よい」方向に変えようとする。そのために内的な行為基準 decision standard を参照して、「よくする」方法を探し出す。そうして行為決断 decision して、外部に行為 action する。このとき、価値基準や行為基準は全称命題 universal proposition、すなわち「すべての A について B である」という形をしている。このような「私的な全称命題のシステム」を

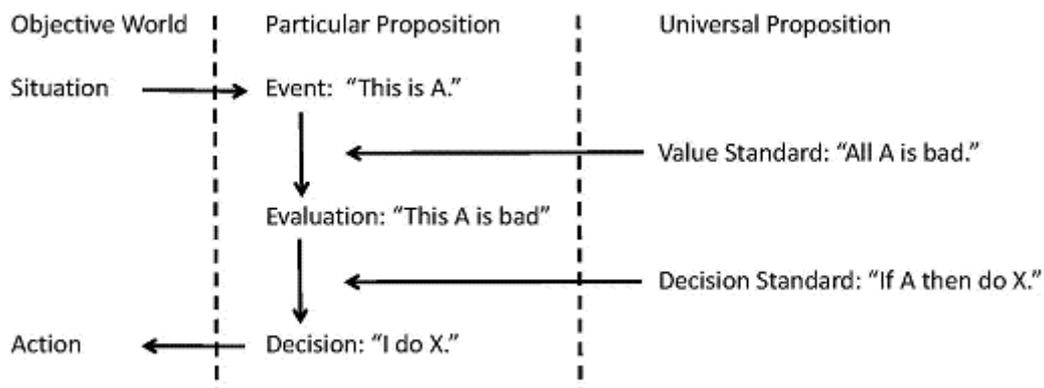


図 1

ライフスタイルという。

これは別に珍しいことを言っているわけではなくて、アドラーが、ライフスタイルを「個人の運動法則 individual law of movement」であると言ったのを、「私的な全称命題のシステム private system of universal propositions」であると言いかえて、そのまま論理学の形式に書いたものである。もし新しい点があるとすれば、全称命題を、事態の価値判断に関わる価値基準、すなわち「すべてのAはよい（わるい）」と、行為決断の判断にかかわる行為基準、すなわち「もしわるいAが起こったのであれば、Xせよ」との、2つに分けたことであろうか。

この方法は、しかし人々にはわかりにくかったようで、あまり広く実践されなかった。論理的なものと言いつつなじめない人が多かったことが理由ではないかと思っている。

討論

西垣：話が難しいわ。

野田：わからないところを聞いてください。

西垣：シャルマン先生やモザク先生が現象学ないし解釈学の影響下にあつて直感的に早期回想を解釈なさったってところなんだけど、「現象学ないし解釈学」について、もうすこし説明してくださらない？

野田：はいはい。ディルタイに言及していますが、19世紀末から20世紀初頭に活躍したドイツの哲学者です。彼は、自然科学 Naturwissenschaften, natural sciences と精神科学 Geisteswissenschaften, human sciences とを区別して、「自然科学は対象を説明するのに対して、精神科学は対象を了解する」という意味のことを言ったんです。説明する erkrären, clarify というのは、対象を細かく分析して、その関係をあきらかにするというようなやりかたで、了解する verstehen, understand というのは、そういうことをしないで、直観を使っていきなり「わかった」と思うことです。

西垣：なんだか触覚的ね。

野田：そうかもしれません。ディルタイの哲学はハイデガー Martin Heidegger (1889-1976) に受け継がれて、フッサール Edmund Husserl (1859-1938) の現象学と結合し、解釈学という学問が成立したんです。由来からわかるように、解釈学は、こまごまと分析したりしないで、いきなりまるごとを「わかる」んです。

西垣：どうして「いきなりわかる」というようなことができるの？

野田：そう思うのは、あなたが20世紀後半の人だからですよ。19世紀後半や20世紀前半の人にとっては、それはそんなに不思議なことではなかったみたいです。彼らは「人間の感じ方の共通性」ということを信じられたんでしょうね。ヨーロッパだけが世界で、西洋文明だけが文明だった時代ですから。だから、「相手も自分と同じ感じ方をするはずだ」ということを、自然に信じることができたんです。

西垣：今は、アジア人やアフリカ人などもあるからね。

野田：いるのは、あの時代にもいたんですけれど、ヨーロッパ人は、アジアやアフリカに文明があるとは思っていませんでした。それが、フランスの人類学者レヴィ・ストロース Claude Lévi-Strauss が、南米のアマゾンの原住民の研究をして、彼らの生活のしかたにきっちりとした哲学があり、ヨーロッパ文明に対比できるような意味での文明がそこにあることを証明したんです。1950年代のことです。アマゾンの原住民だけではなくて、日本人だって、インド人だって、アラビア人だって、ヨーロッパ文明とは違うシステムの文明をもっていることを、20世

紀の半ばごろに、ヨーロッパ人ははじめて気がつきました。

西垣：それまでは「野蛮人」と思っていたのね。

野田：そのとおりです。だから、レヴィ・ストロース以前は、文明的なものであるかぎり「了解可能」だし、もし「了解不能」なら、野蛮であるか狂っているかだと考えました。哲学者ヤスパース Karl Jaspers (1883-1969) は、若いころは精神科医だったのですが、統合失調症患者は「了解不能」であると考えました。それと同じように、「野蛮人」たちも「了解不能」でかたづけられたんです。「正常なもの」は「了解可能」であるはずなんです。

西垣：シャルマン先生やモザク先生は、早期回想を「了解」されたわけね。

野田：それは正確な言い方ですね。彼らは「分析」したんじゃなくて「了解」したんです。

西垣：「アドラー心理学とフロイト心理学のエピソード分析法」では、それに反抗したわけ？

野田：そうかもしれません。あの論文のやり方は、論理学という分析的な方法を使っていて、ディルタイ風にいえば自然科学的ですからね。それは、私がひとりで「反抗」していたわけじゃなくて、時代の流れだったんです。直感的な了解ということが信じられなくなっていたし、それと同時に、レヴィ・ストロースが神話分析に使った方法が、早期回想などのエピソード分析に使えるのではないかという話が、外国のアドラー心理学のあちこちでささやかにはじめていました。ただ、あの論文の方法は、あまりに数学風だったので、一般受けしなかったようです。

ペルソナ概念の居心地の悪さ

論文「多重人格モデルのアドラー心理学」^[2]の中で、私は従来のライフスタイル論が考えているライフスタイルの特徴を、次のようにまとめた。

個別性：ライフスタイルは人ごとに違っている。

恒常性：ひとたび形成されると変りにくい。

統一性：一人にひとつしかない整合的な全体である。

主宰性：それが行動を決定している。

そして、社会構築論 social constructionism にたつヴィヴィアン・バー Vivian Burr^[3]を援用しながら、これらの前提には何も証拠がなく、西欧的な常識の中で、われわれがただそのように思い込んでいるだけかもしれないということを指摘した。その論文の中で、とくに批判していたのは、統一性、すなわち、ライフスタイルが一人にひとつしかない、という点である。そのような考えにもとづいて、私はペルソナ persona という概念を提唱した。

個人治療を中心とする日常臨床の中では、ペルソナの存在を実感することはそんなに多くないのだが、家族療法をしていると、たえずペルソナの存在を感じる。すなわち、ある個人の行動様式が、状況に応じてまるで別人のように変わってしまうことがある。また、家族療法でなくても、治療者の前ではとても従順で素直な少年が、家族や嫌いな教師と一緒にいるときわめて情緒不安定で反抗的な少年に変貌するというようなことは、児童思春期臨床に従事する治療者や学校教師たちは常に経験するところであろう。

ペルソナ概念は、治療的にきわめて有益であった。すなわち、あるペルソナに名前をつけることによって、随意にそのペルソナを呼び出すことができ、問題解決が容易になることがある。この方法は、ライフスタイル診断などの複雑な技法を使わなくてもおこなえるし、しかも有効な治療法であるので、多くの治療者に採用された。

しかし、アドラーは、人格の統一性 *unity of personality* を深く信じていて、以下のように書いている。^[4]

私の仕事のごく初期に、人は自己一貫的な統一体であることを私は見つけだした。個人心理学のもっとも重要な課題はおのおのの個人のこの統一性を証明することである。その人の思考、感情、行為の中に、いわゆる意識と無意識の中に、人格のあらゆる表現の中に。この自己一貫的な統一体のことを個人のライフスタイルと呼ぶのである。

論文「多重人格モデルのアドラー心理学」を書いた時点では、このような人格の統一性とペルソナ理論との折り合いが、かならずしもうまくついていなかったように思う。

討論

西垣：ペルソナ理論って、便利じゃない。なにをそんなにこだわっているの？

野田：ペルソナ理論が出てきたのは、一方では催眠療法での体験もあったけれど、一方ではバーなどの社会構築主義の影響です。社会構築主義とアドラー心理学とをどう折合わせるかは、2002年の時点では、世界中のアドレリアンにとって、まだ未解決の問題だったのです。

西垣：社会構築主義って、どういうこと？

野田：社会構築主義者たちは、家族療法の経験の中で、「人間が環境を作ると同時に、環境が人間を作る」ことを体験しました。ちなみに、これはアドラーの言葉なんだけどね。つまり、人格というのは、社会統合的 *socially embedded* にとらえないといけないと思うようになったんです。

西垣：「社会統合的に」って？

野田：ライフスタイルは環境に組み込まれていて、環境が変わればライフスタイルも変わる、ということなんです。

西垣：それがペルソナ論でしょう？

野田：そうです。ペルソナ論は、環境と独立した、固定したライフスタイルの存在を、かならずしも想定していないのです。状況に応じて、複数のペルソナのうちのどれかひとつがあらわれて、それが行動を決めていると考えています。しかも、それら複数のペルソナの背後に一貫した方向性があるのかないのかについては、論じていないんです。

西垣：それじゃイヤなのね。

野田：これは、アドラー心理学のアイデンティティ問題です。社会構築主義の影響を受ける中で、世界中のアドレリアンたちが、アドラー心理学のアイデンティティ問題に突き当たりました。

西垣：「アイデンティティ問題」って？

野田：どこまではアドラー心理学で、どこから先はアドラー心理学でないか、ということです。アメリカのレン・スペリー *Ren Sperry* は「私はアドレリアンか？」^[5]という論文を書いていますし、これは翻訳して紹介したのですが、スイス・アドラー心理学会が「アドラー心理学のアイデンティティ」に関する宣言をしています^{[6][7]}。時代の影響を受けて自由に考えていると、考えが次第に古典アドラー心理学から離れていって、いったい自分がアドレリアンと呼ばれていいのかどうか不安になるのです。それは私もそうでした。

西垣：「アドレリアンと呼ばれていいのか」ということについて、もうすこし。

野田：野田心理学やスペリー心理学よりも、アドラー心理学の方がベターだと思うんですよ。つ

まり、アドラーという共通の足場があって、みんなで考える方が、建設的だと思うんです。私がひたすら独創的になると、人と話が通じなくなって一人一派になるか、あるいは人を私の弟子にして野田流を創始するか、どちらかを選ばなければならなくなるでしょう。そのどちらも望んでいないんです。

西垣：どうして一流一派の創始者になりたくないの？

野田：ひとつには、アドラーの方が私より賢いからです。アドラー個人もですが、その弟子たちがこの 100 年に作り上げた基礎の上で話をする方が、ずっといいことだと思います。もうひとつは、世界の主流は、相変わらずフロイト心理学です。それに対抗するためには、アドラー心理学の統一性を保っておいた方が賢明だからです。

西垣：政治的なことなの？

野田：まあそうですね。巨大な敵を相手にするのだから、小さな意見の相違で味方が分裂することは好ましくない。アドラー心理学は人類の希望なんです。フロイト心理学が絶望と滅亡への道であるのに対してね。

西垣：じゃあ、学問的にはどちらでもいいんだ。

野田：そんなことはありません。先ほどもいいましたように、アドラーは私よりも賢いと思うんです。彼は作曲家で、私は演奏家だとたとえるといいかな。彼が置いた基礎の上でヴァリエーションを演奏している方が、うんといい音楽になるんですよ。

西垣：アドラーに対して劣等感をもっているわけね。

野田：すぐれた師匠というのはそういうものでしょう？

ポスト構造主義への回帰

その後、「語りなおしとしての心理療法」^[8]の中で、表層構造 superficial structure・静的深層構造 static deep structure・動的深層構造 dynamic deep structure という3つの概念を提案した。表層構造というのは、あるエピソードないし早期回想の背後に想定される構造である。静的深層構造というのは、複数のエピソードや早期回想を比較して、それらに共通して認められる構造である。動的深層構造というのは、静的深層構造のさらに背後に想定される、相対的マイナスから相対的プラスへの目標追求である。

ここでは、エピソードの中のある単語を、それと差異をもつ単語との対比で理解する。たとえば、早期回想の中に出てくる、「兄」という単語を「姉」や「弟」との差異で理解し、あるいは「両親」との差異で理解し、あるいは「友だち」との差異で理解する。もし「兄は面白い人でした」というのであれば、「では、誰が面白くない人なのか」と考える。さらに、述語「面白い」についても、それを差異をもって対立している言葉はなんなのかを考える。たとえば「退屈だ」とか「つまらない」とかいう語が考えられるが、それらが誰にあてはまるのかを考える。そうして、ひとつの連想の表としての構造を見つけ出す。

「アドラー心理学とフロイト心理学のエピソード分析法」の中で用いた方法は、シャルマンやモザクが用いていたのと同じ、認知主義的な方法であったが、「語りなおしとしての心理療法」の中で用いた方法は、レヴィ・ストロースの神話分析の影響を受けて考えついたもので、構造主義的なものである。すなわち、信念 convictions とよばれる仮説構成体を用いないでライフスタイルを分析しようとしている。

この方法は、科学的に厳密なのが長所だが、実践するとたいへん手間がかかるのが短所だ。エピソードに出て来る単語をひとつひとつ取りあげて、それと対立関係にある単語を考え、それら

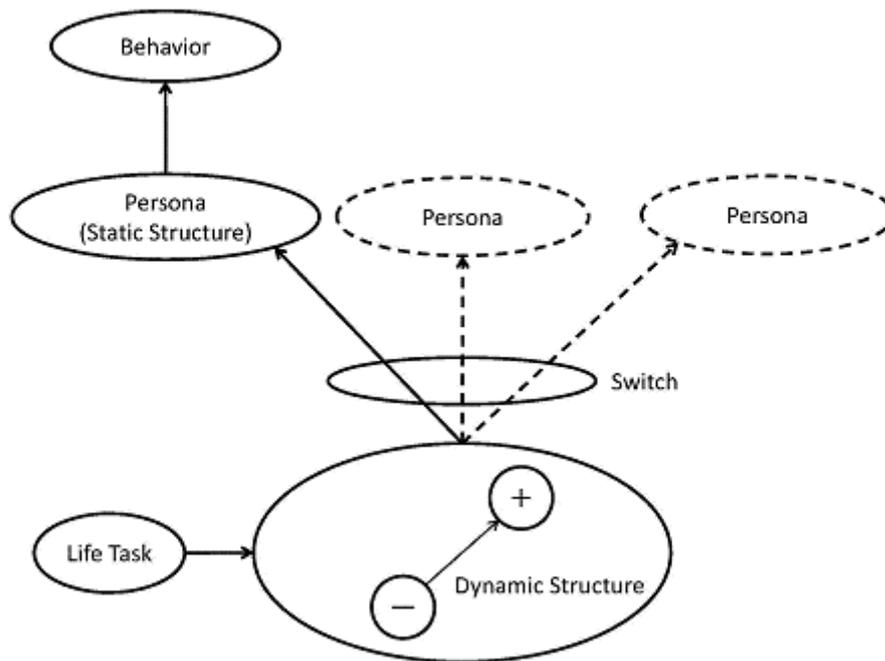


図 2

の差異を理解し、そこからさまざまな単語間の関係のネットワークを再構築していくわけだから、時間的にも労力的にもたいへんだし、あまりにも細かい作業なので、クライアントとの共同作業が困難だ。人類学者のように、現地で一気に情報を収集してから、故国の研究室に帰って、何年もかけてそれを分析するのであれば、この方法でもかまわないが、臨床現場でのライフスタイル分析は、そんなに時間をかけるわけにはいかない。

ともあれ、原理としては、単一の動的深層構造を想定し、それが複数の静的深層構造を使っていると考えれば、人格の統一性についてのアドラーの理論と矛盾することはなくなった。つまり、社会構築主義的な統一的な単一の人格の存在を考えない多重人格論から、ポスト構造主義的な単一人格上の多重ペルソナ論に変化したのである。この考え方を図 2 に示した。ある動的深層構造 **Dynamic (Deep) Structure** をもった個人がライフタスク **Life Task** に会うと、なんらかのスイッチ **Switch** があって、どれかのペルソナ **Persona** を選択する。たとえば、子どもが宿題をしないのを見て、「母親」というペルソナを選択する。ペルソナとは、静的深層構造 **Static (Deep) Structure** の別名である。そうして行動 **Behavior** が決められる。今では、このようにして、単一人格と複数のペルソナの関係を説明している。

討論

西垣：構造主義ってなに？

野田：もともとは言語学から出てきています。ある文の意味がどうしてわかるかという、その文を構成している単語のひとつひとつの意味がわかることと、次にそれらの単語の関係がわかることが必要ですね。

西垣：そうね。

野田：じゃあ、単語の意味はどうしてわかるかという、他の単語との差異 **difference** でわかる

のだと、言語学者ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913) が言いました。それにもとづいて、エピソードの中の単語を分析しました。そこから必然的に、各単語間の関係も明らかになります。このような、単語の意味や文の意味をなりたたせているしくみを構造といいます。

西垣：辞書とか文法みたいなもの？

野田：まあ、そうですね。そのような分析法を、社会現象を対象にして使うのを、構造主義といいます。

西垣：たとえば？

野田：挨拶を例にしましょうか。お友だちと会ったときと、子どもさんの担任の先生と会ったときと、ご主人の上司と会ったときと、お母さまの主治医と会ったときと、みんなご挨拶の仕方が違うでしょう。

西垣：それはそうね。

野田：なぜある場合にある挨拶をするのかは、理由はよくわからないんだけど、差異が伝統的に決まっているんですね。ちょうど言葉の文法のように。こうして社会現象を分析するんです。

西垣：ふうむ。それが構造主義ね。それは認知主義とはどう違うの？

野田：認知主義は、信念とよばれるものが心の中にあるのだと考えます。でも、誰も信念そのものを見た人はいないんです。これにたいして、構造は、心の中にあるのではなくて、たとえばエピソードの文の中や、儀礼の行為の中にあるんです。ちょうど文法のように。

西垣：文法も見えないわ。

野田：直接には見えないけれど、示してみることはできるでしょう。たとえば、「行く」という言葉は、否定するときはきっと「行かない」になって「行かない」にならないとか、「来る」という言葉は、否定するときはきっと「来ない」になって「来ない」にならないとか。

西垣：まあ、それはそうね。

野田：それと同じように、ある人の複数のエピソードについて、どれの中でも「何かをなし遂げようとする、かならず邪魔をする出来事がおこる」というようなことを示すことができます。

西垣：それは「人々は私の邪魔をする」という信念がある、ということじゃないの？

野田：心の中にそういう信念があるかどうかを、構造主義は論じていないのです。語られたエピソードの中に、そういう構造があると論じているだけなんです。

西垣：微妙な違いね。

野田：そんなことはありません。心理学が科学的であるためには、重要な違いなんです。構造主義の考え方だと、観察できない仮説構成体を使わなくて済むんです。見えないものについて話をしたくないんですよ。

西垣：ペルソナ理論との関係について、もうすこし説明して。

野田：動的深層構造という名前で、相対的マイナスから相対的プラスへの目標追求を考え、これは一人の個人にひとつしかないのだと考えました。そこから出てくる静的深層構造については、複数あるのだと考えています。ひとつの動的深層構造は、それと矛盾しない複数の静的深層構造を造りだすことができる。この静的深層構造がペルソナなんです。

西垣：表層構造はどうなの？

野田：表層構造というのは、エピソードを分析するときの作業仮説なので、分析されている個人がほんとうにもっているかどうかかわからないんです。複数のエピソードを分析して、その共通性をみつけることで、はじめて深層構造がわかる。深層構造は、たまたま表層構造と同じものであるかもしれませんが、表層構造の分析は間違いで、それとは別の深層構造が見つかることだってあるかもしれません。

西垣：表層構造はゲッシングだってことね。

野田：そうです。まだ確かめられていないゲッシングです。

西垣：クライアントが表層構造に合意していても、まだ確かめられていないと考えるの？

野田：そう考えた方がいいんじゃないですか。クライアントは、けっこう治療者の言い方に影響されますから。

西垣：動的深層構造はひとつ、静的深層構造は複数、ということね。静的深層構造をペルソナと考えるなら、その後ろに、動的深層構造というただひとつの目標追求があるんだ。

野田：正確な理解です。すべてのペルソナに共通する目標追求がある。出発点と目標はひとつで、そこにいたる道筋は複数ある。たとえば、「私は力を持たなければ」という動的深層構造をもっている人が、母親をする場合には保護的で優しく、妻をする場合には支配的で口うるさく、嫁をする場合には反抗的で黙り込み、仲間といるときはリーダーシップを発揮して陽気だ、というようなことです。ペルソナごとに、静的深層構造が違うんです。

西垣：ずっと気になっていたんだけど、ペルソナごとに、違う早期回想があるの？

野田：どうなんでしょうね。たぶんないんだと思います。同じ早期回想を、ペルソナごとに違った解釈で使っているんだと、今は考えています。しかし、実証的な研究がないのでなんともいえません。今後のテーマですね。

欧米のアドラー心理学との関係

さらにその後、アンドリエッセンス Else Andriessens のライフスタイル診断シート（いわゆるチューリッヒ・シート）によるライフスタイル分析を説明する「ライフスタイル分析の新しい方法」^{[9][10][11]}において、私的論理 private logic と私的意味づけ private meaning という概念を紹介した。これらの用語はアドラー以来使われていたのだが、厳密に定義されていなかった。それを、チューリッヒを中心とするドイツ語圏のアドラー心理学が、私的論理を私がいう静的深層構造に、私的意味づけを動的深層構造に相当するように再定義した。おかげで、私の考えと欧米のアドラー心理学との間の連絡がついて、21世紀的な意味での新しいライフスタイル分析法が確立したと考えてよい状況になった。

チューリッヒ・シートもまた、ポスト構造主義の影響下に成立している。しかし、いくつかのきわだった特徴がある。ひとつは、クライアントが語ったエピソードを、「書きとりますので、もういちどゆっくり語ってください」と頼んで、語られたもの（パロール）ではなく、書きとられたもの（エクリチュール）を材料に以下の分析を進めることである。この方法は臨床的な便宜から考え出されたものだと思うが、同時に、人類学者たちの仕事との類似を感じざるをえない。人類学者は異国語で語られた神話や伝説を材料に仕事をするが、それは翻訳されてはじめて分析の材料になるので、彼らの分析対象は、パロールそのものではなくて、エクリチュールなのである。しかし、この方法には、臨床では若干の問題がある。すなわち、語られたエピソードのうちの重要な部分が、書くために再話するときに欠落することがあるのである。それゆえ、ただ機械的に書きとるのではなくて、語られたものと照合して、「〇〇については、先ほど言われましたが、今は言っておられません。書いておかなくていいですか？」と確認する必要があるときがある。とくに、日本語のように口語と文章語の乖離の大きな言語では、これは問題になることが多いと思う。

そうしてエクリチュールとしてのテキストを得たあとで、意見と事実とをおおまかに分離して、まず事実についてのみ分析をはじめ。チューリッヒ・シートは、治療者とクライアントが共同作業でもってライフスタイル分析することを前提にして作られていて、治療者だけでなく、クラ

イベントをも物語の外側の客観的な場所に置くためである。ちょうど演劇の観客の位置に置くのである。観客からは、俳優の頭の中で起こっていることは見えず、ただ客観的に観察できることだけが見える。その位置に治療者だけでなくクライアントも座ることで、共通の視点で分析をはじめることができる。これも人類学者の仕事を連想させる。そもそも神話や伝説は、主人公の心情を語ることは稀で、ただ行為を述べていく。また、それらはしばしば演劇の形をとっていて、外から観察されるものである。ともあれ、この事実と意見の分離作業は、ライフスタイル分析にとってもきわめて有益な方法であることが体験されるし、またクライアントに対する教育効果も大きいように思われる。

討論

西垣：チューリッヒ・シートとの関係だけど、動的深層構造イコール私的意味づけ、静的深層構造イコール私的論理、と考えていいのね。

野田：そうしましょう。アドラーが使った用語を使う方がいいから、今後は、動的深層構造だの静的深層構造だのといわないで、私的意味づけと私的論理で統一した方がいいでしょうね。

西垣：ちょっと話が戻るけど、構造主義と社会構築主義の関係は？

野田：社会構築主義は、構造主義を批判する中で成立したものです。構造主義は、実存主義を批判する中で生じました。だから、まず実存主義から話をはじめなければなりません。

西垣：どうぞ。

野田：実存主義は、人間には完全な自由意志があるかのような話し方をしたんです。つまり、人間は決断すれば、どのようにでも変れると。典型的にはサルトル Jean-Paul Sartre (1905-1980) がそう考えていました。

西垣：アドラー心理学風にいうと、自由意志論ね。

野田：そうです。これを、レヴィ・ストロースたち構造主義者が、実証的な証拠をあげて反論しました。つまり、人間は文化、あるいは今風にいうと社会が共有している物語によって規定されていて、その物語を離れては決断できない。どんなに自由意志に見えていても、実は物語に縛られている、ということです。

西垣：それは、決定論ということ？

野田：ほとんどそのようにとらえられました。そこで問題になったのは、じゃあ、「人間の責任はどうなるのか？」ということです。実存主義は自由意志論だったので、個人は自分の決断や行為について 100 パーセント責任をとることになりますが、構造主義が決定論だとすると、個人がどんな決断をするのも、その人を取りまく社会の物語に支配されてするのであって、その個人の責任であるとはいえなくなる。

西垣：ちょっと西洋的な議論ね。ついていけないかも。

野田：まさにそうです。日本人は情勢に流されるのが得意ですし、情勢に流されてあることをしたのであれば無罪だと考える癖があります。「あのときは、あれしかしょうがなかったんだ」というわけです。しかし、西洋人は、そうは思わないんです。情勢がどうであっても、自分がどう決断するかだけが問題なのです。自分で決断したのであれば、たとえ結果的に間違っているとしても、責任をとったことになるが、情勢に流されて行為したのでは、無責任であり、有罪だと考えるんです。だから、自由意志論を否定するというのは、西洋人にとっては、良心を否定されているような気がしたんです。そこで、西洋人は、なんとか自由意志を回復し、そのことを通じて責任を回復したかったんです。

西垣：それで、どうなったの？

野田：「ポストモダン心理学とアドラー心理学」^[12]の中でもとりあげたのですが、先ほどすこし述べたように、構造主義はソシュールの言語学にもとづいています。ソシュールは、言葉はシニフィアン *signifiant*（意味するもの）とシニフィエ *signifié*（意味されるもの）の結合物で、しかもその結合は恣意的 *arbitrary* だといったのですが、この恣意的というのがどういう意味かです。たとえば、ある音（たとえばイヌという音）を、ある対象（たとえば犬という動物）と結びつけている程度は、どのくらい強いのか。ソシュールがいったのは、日本語だと動物の犬はイヌという音と結びついているが、英語だと *dog* という音と結びついている。だから、イヌという音と犬という動物の結びつきは、絶対的なものではない。こういうことを恣意的といっていたのです。

西垣：なるほどね。

野田：そうだとすると、国語を共有している人々の間では、そんなに恣意的じゃないわけだ。つまり、日本人が日本人に向かって「イヌ」と言ったら、相手は動物の犬を連想して、猫は連想しないんだ。音の対象の結びつきが、日本語の中では決まっているからね。もし、音と対象とを勝手気ままに結びつけていいなら、言葉が通じなくなります。ともあれ、レヴィ・ストロースなどは、そういうアイデアにもとづいて文明の分析をしたんです。

西垣：文明の分析というのが、まだよくわからない。もうちょっと具体的に言って。

野田：たとえば、「しめ縄」というものがあります。藁を編んで、多くの場合はそこから紙をたらしてあります。それは、日本では、神聖な領域を区切るための記号です。

西垣：神社なんかに行くときあるわね。

野田：正月の「しめ飾り」もそうですし、地鎮祭の区切りにも使いますし、相撲取りがマワシから垂らしているのもそうです。どの場合でも、日本文化の中にある人は、「ああ、あれは結界で、あの中は神聖な領域だな」とわかるわけです。恣意的じゃないんです。ところが、外国人にはそれはわかりません。外国では別のものが結界に使われます。たとえば十字架とかね。だから、同じ文化の中では恣意的でなく、異文化を比較するなら恣意的なんです。

西垣：なるほどね。

野田：レヴィ・ストロースはアマゾンの原住民を観察して、彼らの記号 *signe* のシステムを解明しました。ちょうど、「しめ縄」と「神聖な領域」の関係を解明するようにね。それと同じ方法を、ロラン・バルトは現代フランス文明で使いました。そうすると、アマゾンの原住民がタブーに縛られているのと同じように、現代フランス人もタブーに縛られていることがわかったんです。

西垣：タブーって？

野田：バルトは服装の流行の研究をしましたが、たとえば日本でも、女性の服装には流行があります。流行を無視した服を着ることは、かなり難しいことです。

西垣：それはそうね。

野田：これがタブーで、それを決めているのが構造、あるいは物語とよばれるものです。

西垣：でも、流行に反した服を着る人もいるわ。

野田：そうです。でも、あまりにも流行に反した服を着ると、正気だと思われなくなる。たとえば女性が、どこか南の方の部族の正装みたいな、上半身を露出して腰蓑をつけて歩くファッションで日本の町を歩くと、狂っているのではないかと思われるでしょう。つまり「了解不能」になってしまう。

西垣：まあ、そこまでするとそうでしょうね。でも、ファッションだと、いくつかの傾向が同時に流行しているわ。たとえばマダム風とか若者風とか。

野田：それはいい指摘です。文化人類学が対象にするような人たちは、ひとつだけの記号のシステムしかもっていないのだけれど、現代社会では、複数の記号のシステムが並行して存在しています。記号のシステムを文化といってもいいでしょうし、価値観といってもいいでしょう。現代人は、複数の価値観の中から、どれかを選べます。ただ、その外側に出ることはできない。ある範囲内で、けっこう自由意志があるんです。

西垣：アドラー心理学風にいうと、軟らかい決定論ね。

野田：そのとおりです。そこで、構造主義を批判する人たちは、「多様な価値観の併存」という考え方を打ち出して、ある範囲の中でなら人間が大幅に選択できるのだと考えました。そうして、選択の自由と責任という考え方を復活させたのです。これをポスト構造主義 post-structuralism といいます。

西垣：ポスト構造主義と社会構築主義は同じものなの？

野田：私は違うと考えています。どちらも「多様な価値観の併存」を認めています。ポスト構造主義は、それらの多様な価値観を貫く一貫性があると考えた考え方、社会構築主義は、一貫性はずいぶんないと考えた考え方だと区別しています。「多重人格モデルのアドラー心理学」のペルソナ論は社会構築主義的で、「語りなおしとしての心理療法」のライフスタイル論はポスト構造主義的なんです。動的深層構造、あるいは私的意味づけ、のおかげで、すべてのペルソナを貫く一貫性を回復したんです。アドラーの、相対的マイナスから相対的プラスへの目標追求性というアイデアは、天才的だと思います。

西垣：どういうこと？

野田：社会構築主義は、だって、文化の否定でしょう。たとえば、日本文化の中にさまざまな価値観が併存しているけれど、でもアメリカ文化や中国文化とは違う、あきらかに日本文化独特の特徴もあるわけです。社会構築主義は、そういうことが説明できない。ライフスタイル論についても、たくさんのペルソナをもっているにしても、なお個人特有の個性があるわけで、それを社会構築主義は説明できない。目標追求性というアドラー心理学の基本前提のおかげで、そういう混乱から抜け出せたんです。こうして、アドラー心理学のアイデンティティを回復することができました。

ペルソナとライフスタイルの成長

私的意味づけは、アドラーがいったように、通常は一生にわたって変化しない。どのような治療を受けても、まったく別の私的意味づけをもつようにはならない。それは経験上、たしかにそうである。しかし、私的意味づけが「成長」することはある。たとえば、「すべての人から、あらゆる場合に、愛されていないといけない」というような私的意味づけを、「なるべく多くの人から、なるべく多くの場合に、愛されていないといけない」というように変化させることは可能である。このような変化を「成長」とよんでいる。しかし、「人から愛されるかどうかは問題ではない」というような私的意味づけに変化させることはできない。

このようなライフスタイルの成長過程において、ペルソナが果たす役割がある。そのことについて考えるために、ペルソナがどのようにして切り替わるのかを考察してみたい。まず、ペルソナは離散的 discrete である。すなわち、あるペルソナと別のペルソナとは、見かけ上は不連続で、その移行型というようなものはない。そのような不連続なペルソナが、あるきっかけで切り替わる。経験的には、ふたつの方法がある。ひとつは、そのときの状況をどう理解するかによって変る。たとえば、ある人が、「この仕事を明日までにやっておいてください」といわれたとする。

それが、会社の上司からいわれたのであれば、「はい」と素直に聞くだろうが、配偶者からいわれたのであれば、「なぜ私がやるんですか」と反抗的になるかもしれない。それはどうしてかという、上司との関係では、「会社」という物語の中で「会社員」というペルソナが使われているが、配偶者との関係では、「家族」という物語の中で「夫」あるいは「妻」というペルソナが使われているからである。

もうひとつは、そのときの自分をどう理解するかによって変る。催眠療法で、人前であがる人に、人前であがらない人を思い出してもらい、その人の「霊」をつける方法がある。たとえば友人の「妙子さん」という人が、人前であがらないで上手にしゃべることができるとする。そこで、クライアントに暗示して、その妙子さんが「乗り移る」とイメージしてもらおう。そのときの身体感覚の変化を意識した上で、妙子さんになって話してもらいリハーサルしておく。そうして現場では、「妙子さん」と呼ぶと、その「霊」が降りてきて、あがらずに話せると暗示しておく。さて、この「妙子さん」は、ほんとうに友人の霊なのではなくて、そのクライアントがもともと持っていたペルソナである。そのペルソナは、人前で話すときには使われておらず、他の、人前であがるペルソナが使われていた。それを「妙子さん」という言葉をキーワードにして、ペルソナを変換させたわけである。催眠でなくても、同様の方法を、われわれは無意識に使っている。泣いている男の子に、「男の子でしょ、泣くんじゃありません」という母親がいたとする。その母親は子どもの中の「男の子」と名づけられたペルソナを呼び出そうとしている。多くの場合、男の子はそういうペルソナをすでに形成しているので、このアプローチは成功する。あるいは、修学旅行の前に校長が、「本校生徒として恥ずかしくないおこないをするように」と訓辞したとする。その校長は、「〇〇校生徒」というペルソナを呼び出そうとしている。「〇〇校生徒」というペルソナが形成されている生徒は、そういうことをいわなくても「恥ずかしい」おこないはしないだろうし、形成されていない生徒は、そういう「恥ずかしい」おこないをするだろうから、この校長の訓辞は、あまり意味がないような気がする。

いずれの場合も、ペルソナは物語 story と対応してあらわれる。物語というのは、本人と周囲

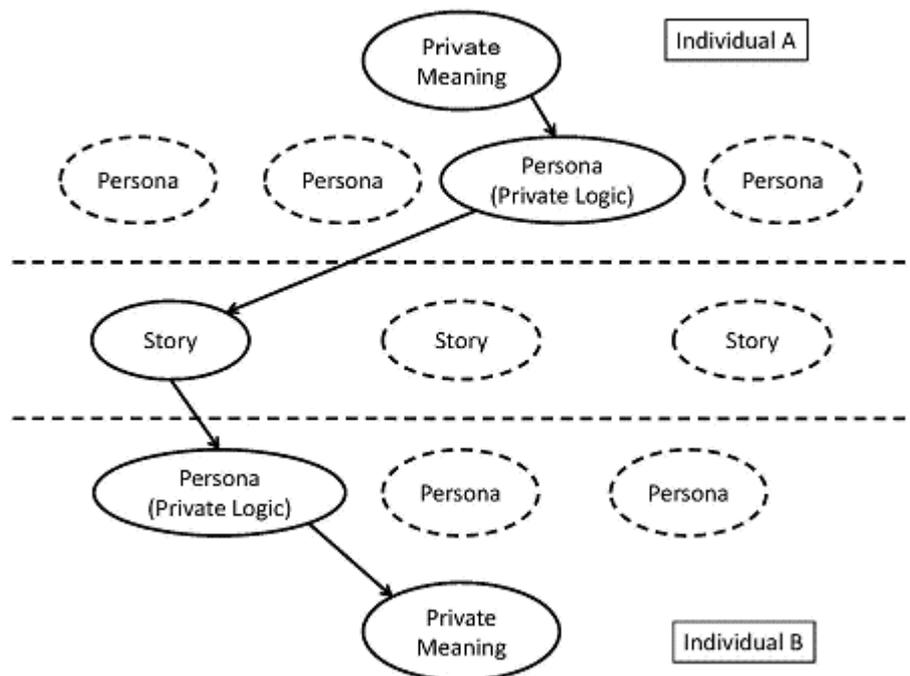


図 3

の人々が共有している構造、あるいは記号のシステム、あるいは文化であり、個々の行動はその物語の中ではじめて意味を持つ。たとえば、兵士が戦争中に敵を殺すのも、強盗が被害者を殺すのも、人を殺すという点では同じ行為なのだが、社会的文脈としての物語が違っているので意味が違ってくる。人は発達の中で、物語に対応したペルソナの使い方を学ぶのであろうと思う。そのようにしてできた物語とペルソナに対応関係を使って、外の世界とつきあい、ライフタスクを解決する。その様子を図3に示す。上に個人A、下に個人Bを示し、中間部は2人の中にある意味空間である。まず、Aがあるペルソナを選択してなにか行為をしようとする。このときAは、実は意味空間の中の物語をひとつ選択している。Bは、それを物語の中で解釈しようとするが、Bが選択した物語はAが選択したものと同じ場合もあるし、違う場合もある。いずれにせよBは物語に対応したペルソナを選択してAの行為を理解し、必要があれば対処行動をする。こうしてコミュニケーションが続いていく。仮に、Aの行為に対応する物語をBがもっていなければ、Aの行為はBにとって「了解不能」になる。また、Aの物語とBの物語が違っておれば、AとBは誤解しあっているかもしれない。Aが採用した物語とBが採用した物語に共通性があるとき、相互に「了解可能」になる。

さて、AがクライアントでありBがその相手役であるとする。治療者はその外側にいる。治療者がAがBに対してある行為をした理由を聞くと、Aは、自分が採用した物語を言うことが多い。たとえば、子どもを叱った母親に、「どうして叱ったんですか？」と尋ねると、「親のつとめです」と答えたとき、「権威的な親」という物語についてその母親は語ったことになる。そこでたとえば、治療者が、「そうして叱ると、子どもは勇気づけられたと思えますか？」と尋ねると、母親は、「勇気づけにはなりませんね」と答えるかもしれない。そこで治療者が、「どうすれば勇気づけになると思えますか？」と問いかけて、母親がある行為を思いついたとする。「それをやってみられますか？」と治療者が聞いたとき、「これはやってみる価値がありますね」と母親が答えたとする、母親は「権威的な親」のかわりに「勇気づける親」という物語を選んだことになる。このときどうして「ペルソナを選んだ」と考えずに、「物語を選んだ」と考えるかということ、物語は社会的に共有されているものだからであり、この場合の「権威的な親」と同様に「勇気づける親」も、この話以前に社会的に共有された物語があったので、母親は比較的簡単にそれを採用することに賛成したのだと考えられるからである。その時点で、母親の中に、それに対応するペルソナが十分に成長していないこともあって、それを使いこなせるようになるためにある程度の訓練が必要な場合もある。ともあれ、そのようにして、新しい物語を採用することによって、新しいペルソナを使って事態に対応するようになり、その結果がよければ、やがて同様の事態では自然に新しいペルソナが採用されるようになるであろう。このようなことを、「ライフスタイルが育つ」と表現してよいと考えている。

討論

西垣：どうしてライフスタイルは「育つ」と言って「変る」と言わないの？

野田：「誤った」ライフスタイルという考え方をやめたいからです。シャルマンやモザクは誤った信念 *mistaken belief* だとか基本的誤り *basic mistakes* だとかというような言い方をしますが、その言い方は、まるで治療者が「正しい」ライフスタイルを知っているかのような感じじゃないですか。治療者は聖人でも裁判官でもありませんから、クライアントを裁く権利はありません。

西垣：自己批判したわけね。

野田：これも、サルトルとレヴィ・ストロースの論争に源があります。サルトルは、こういう風に考えました。人が何かを決断したかぎりには、それが「正しい」と考えているのだ。だから、その決断と違うものは「誤って」いるのでなければならぬ。これにたいして、レヴィ・ストロースは、人類学調査を通じて、価値は文化ごとに相対的であって、絶対的に正しいものとか誤ったものとかを、人は判定することができないと考えました。

西垣：正も不正もないというわけ？

野田：ある文化を特定すれば、その中では正も不正もあります。たとえば、江戸時代の日本だと、チョンマゲをしているのが正で、していないのが不正です。今は、チョンマゲをしていると不正で、していないのが正です。

西垣：つまり、コモンセンスですね。

野田：ああ、そうですね。コモンセンスというものはあると思います。でも、ライフスタイルが「正しい」とか「誤っている」とかの根拠には使えないと思いますね。そこで、「未熟」か「成熟」かを判断基準にしようとするわけです。

西垣：それだと、治療者がクライアントを裁いていることにならないの？

野田：治療者は判断しないで、「その考え方は、子どもっぽいでしょうか、それとも成熟しているでしょうか」と尋ねるだけにします。クライアントが選ぶわけです。

西垣：でも、なんとなく暗黙の圧力を感じそう。

野田：まあね。そこまでは面倒見れない、ということにしておきましょう。

西垣：「ペルソナは離散的だ」ということについて、もうすこし説明してください。

野田：ペルソナには名前がついている、すくなくともつけることができるという話をしました。

西垣：そうですね。

野田：名前がつくということは、他のものとの差異があるということです。なぜなら、名前とは差異のことだから。

西垣：もうすこし具体的に。

野田：たとえば、「私は妻よ」と思うのと「私は嫁よ」と思うのでは、違うでしょう。

西垣：それは違うわ。

野田：「妻」という言葉は「嫁」という言葉と、現代の用語法では、重なり合う部分がありません。つまり、「妻でありかつ嫁である」というような行動様式はない、ということです。

西垣：二項対立しているということ？

野田：二項対立だとはかぎりません。たとえば「私は女よ」とか「私は母よ」とかいうのもあって、それらが相互に重なり合うところがなく、あるいは重なり合うところが少なく、併存している。

西垣：多項対立なわけね。

野田：そういうことですね。このようにして、相互に重なり合うところがなく、差異をもちながら併存しているので、おのおのに名前をつけて区別できるし、おのおのに名前をつけて区別するので、それらが多項対立することになる。名前がつくということと、差異をもって対立することとは、同じことの両面なんです。それをここでは「離散的だ」といっています。言語が離散的であるかぎり、ペルソナも離散的です。

西垣：一人の人はいくつくらいのペルソナをもっているの？

野田：わかりません。かなり数多くもっていますが、無数ではありません。すでに、小さな子どもでも、いくつかのペルソナをもっていることが観察できます。

西垣：ペルソナはどうしてできてくるんでしょうね。

野田：よくわかりません。そういう眼で子どもの観察を丁寧にした人がいないので、よくわかりません。

西垣：ペルソナの数は、大人になっても増えるのかしら？

野田：たとえば学生さんが会社員になったら、「会社員」というペルソナが増えます。その人が係長だの課長だのになったら、「管理職」というペルソナが増えます。結婚したら「夫」なり「妻」なりというペルソナが増えますし、子どもができたら、「父」なり「母」なりというペルソナが増えます。

西垣：いくらでも増えるわけね。

野田：いくらでも、というわけでもないかもしれません。世の中には有限の物語しかありませんから、その各々に合わせるところまで増えるということでしょう。たとえば今は「僧兵」というペルソナは存在しませんが、中世には存在したでしょうね。

西垣：変なたとえね。まあ、それはそれとして、たとえば「学生」というペルソナと「会社員」というペルソナには共通点があるでしょう。

野田：同じ私的意味づけの枠の中にありますから、共通点はもちろんあります。けれど、「私は学生じゃないんだ、会社員なんだ」と考えていて、「学生」というペルソナと「会社員」というペルソナが差異をもって相互排他的に使われているので、相違点もあります。すくなくとも本人の意識としては、違うものだととらえられています。

西垣：「ライフスタイルは10歳以上になると変らない」というのは、ペルソナのことじゃなくて、私的意味づけのことを言っているのね。

野田：そうですね。私的意味づけというレベルでは、たしかに大人になると変らないと思います。しかも、新しいペルソナは、おそらく一生を通じて形成され続けます。「老人」というのも、ひとつのペルソナかもしれない。それを使わないままで年をとる人もいますからね。だから逆に、それを使う人は、年をとってから発達させるんだ。

西垣：ペルソナにはすべて名前がついているの？

野田：もともとついているかどうかはわかりませんが、治療の中ではつけますね。たとえば、「夫としてのあなただとそう言うわけですが、もし会社員としてのあなただと、どう言いますか？」と尋ねたりします。

西垣：「でも、家庭は会社じゃありません」と抵抗しそうな気がするな。

野田：物語がペルソナを決めるわけですね。

西垣：ああ、これがそうなのね。

野田：だから、実際の治療の中では、物語の力を緩めます。たとえば、心理劇です。「これは芝居ですから、いつものあなたとはまったく違うふるまいができます」という保証をするんです。そうすると、物語の力が弱まる。

西垣：他の使い方もある？

野田：ライフスタイル診断と関係して使うこともあります。ある架空の女性ですが、「私は人から愛されたい」と思っていて、しかも「私が積極的に動く、かならず失敗する」と信じていたとします。それで、向こうが愛してくれるのを待っているのですが、愛してくれないと、不安神経症の症状を出して、いたわってもらおうとします。ライフスタイル分析を納得されたあと、徹底操作の段階のことです。

西垣：徹底操作？

野田：あ、すみません。徹底操作 *working-through* というのはフロイトの用語です。精神医学では普通に使うものですから。アドラー心理学では再教育 *re-orientation* といいます。分析が終

わったあと、分析結果を日常のできごとと照らし合わせて、よりよい暮らし方を習いおぼえていく段階のことです。

西垣：なるほどね。

野田：その段階で、夫婦の問題を扱ったのですが、「あなたの目標は、ご主人から愛されたいことですね」と確認します。そうしたうえで、「その場面で、どうふるまうと、ご主人から愛されるでしょうか？」と尋ねます。ふつう、その人は、積極的にはなにもしないのです。「なにか積極的にできることはありますか？」と尋ねると、なにか積極的な行動を言うでしょう。しかし、「でも、そうしても失敗してしまうかもしれません」と言います。そこで、「あなたはできないかもしれないけれど、誰だったらできると思いますか？」と尋ねます。そこで「友だちの道子さんなら」と言ったとしますね。

西垣：あ、わかった。道子さんになるんだ。

野田：そういうことです。それでうまくいけば、道子さんがずっと取り憑いたままになるでしょう。

西垣：そういうのが、「ライフスタイルが変わった」というのか、あるいは「ライフスタイルが育った」というのかにこだわっているわけ？

野田：まあ、そういうことです。同じことで名前が違うだけなんですけど、「変わった」は、変わる前が「誤ったライフスタイル」で、「育った」は、育つ前が「未熟なライフスタイル」だから、「未熟な」の方がマシかなあと思っているんです。それに、新しいペルソナが増えたわけで、前のペルソナはなくなったわけではありませんので、「変わった」よりも「育った」の方が、より近い言い方だと思うのですが。それはともあれ、この例ではペルソナを使いましたが、もしペルソナを使わないと、徹底操作がかなり厳しいものになるかもしれないんですよ。

西垣：厳しいって？

野田：「その場面で、どうふるまうと、ご主人から愛されるでしょうか？」と尋ねて、なにか積極的な行動をいうけれど、「でも、そうしても失敗してしまうかもしれません」といったときに、ペルソナを使わない治療では、「今と同じようにふるまっていると、今と同じことが続きますが、違うことをやってみると、違うことがおこると思います。どうなさいますか？」と、きわめて正対的なメッセージを出さざるをえなくなります。

西垣：正対的って？

野田：正対 **confrontation** というのは、「解釈投与に引き続いて態度決定を迫ること」と定義されています。これって、上手にやっても、やっぱり厳しいんですよ。ペルソナを使うと、「別人になって」やることができ、楽なんです。クライアントさんが楽な治療をしたいんですよ。

西垣：なるほどね。最後に、物語についてももう少し説明していただける？

野田：物語は、社会的に共有されているものなんです。たとえば「母親」という物語があるんですが、多くの人に聞いて回ると、まあまあ似たような話なんですよ。すくなくともそれは、「父親」とか「妻」とか「嫁」とか「女」とか「娘」とかとは差異をもっている。「母物語」と「父物語」は、違うお話しからできているんです。

西垣：お話し、って？

野田：エピソードの集まりです。物語は、結局のところ、一連のエピソードの集まりだと思っています。社会の全員がまったく同じエピソードを同じ数だけ共有しているわけではないけれど、なんとなく共通したエピソードを共有していて、それを物語と呼んでいます。

西垣：早期回想も物語？

野田：早期回想は、まったく私的なものですから、物語とはちょっと呼べない。物語というのは、ある程度は社会的に共有されているものだと考えています。それらの物語に、「母物語」だと

か「女物語」だとかいう物語の題名がつけられている。そのおのおのに対応して「母」とか「女」とかいったペルソナができているんだと思いますね。

西垣：物語の数とペルソナの数と同じなの？

野田：違うと思います。ひとつの物語を複数のペルソナで処理することはあまりないように思うけれど、複数の物語をひとつのペルソナで処理する人はいますからね。まあ、このあたりはまだよくわかっていません。これからの研究の課題です。

西垣：なんだかたくさん課題が残っているのね。

野田：仕事はいくらでもあります。いいことです。

文献

- [1] 野田俊作：アドラー心理学とフロイト心理学のエピソード分析法. アドレリアン 11(1): 1, 1997.
- [2] 野田俊作：多重人格モデルのアドラー心理学. アドレリアン 15(3): 197, 2002.
- [3] ヴィヴィアン・バー著, 田中一彦訳：社会構築主義への招待. 川島書店, 1997.
- [4] Ansbacher, H.L. and Ansbacher, R.R.: The Individual Psychology of Alfred Adler. Harper, New York, 1955, p.175.
- [5] Sperry, L.: To Be or Not To Be Adlerian: The Personal and Organizational Dynamics of Establishing One's Theoretical Orientation. Journal of Individual Psychology, 63(2): 126, 2007.
- [6] Erklärung zur individualpsychologischen Identität der Schweizerischen Gesellschaft für Individualpsychologie. Zeitschrift für Individualpsychologie, 25(4): 364, 2000.
- [7] 野田俊作：アドラー心理学のアイデンティティに関するチューリッヒ宣言 翻訳と解説. アドレリアン 21(2): 126, 2008.
- [8] 野田俊作：語りなおしとしての心理療法. アドレリアン 20(3): 271, 2007.
- [9] 野田俊作：ライフスタイル分析の新しい方法（1）現在の問題の語りなおし. アドレリアン 21(1): 1, 2007.
- [10] 野田俊作：ライフスタイル分析の新しい方法（2）家族布置と早期回想の分析. アドレリアン 21(2): 113, 2008.
- [11] 野田俊作：ライフスタイル分析の新しい方法（3）考察. アドレリアン 21(3): 215, 2008.
- [12] 野田俊作：ポストモダン心理学とアドラー心理学. アドレリアン 20(2): 89, 2007.

更新履歴

2013年5月1日 アドレリアン掲載号より転載